

## 審査の結果の要旨

氏名 武藤 世良

現在、感情心理学の領域では、人が多様な対人関係状況において経験し表出し得る、種々の社会的感情の生起機序と機能性とを実証的に審らかにしようとする流れが顕著になってきている。本論は、その中でも、近年、人の発達および教育の文脈において注目度の高い、尊敬とその関連感情に焦点化し、殊に「自己ピグマリオン過程 (self-Pygmalion process)」という視座から、精緻な分析・論考を行ったものである。

本論の第Ⅰ部では、まず、尊敬には「義務尊敬」「感情態度尊敬」「感情状態尊敬」の3種のモードがあることが理論的に整理され、その中でも後2者の感情モードの尊敬に関して特に実証的検討の必要性が高いことなどが論じられた。そして、個人が卓越した特定他者を役割モデルとして追随し、自己是正・自己向上を図り実現していく上で、それらがきわめて重要な働きをなすのではないかという「自己ピグマリオン」仮説が提示された。

第Ⅱ部(研究1・2)では、先行研究において尊敬関連感情には、その概念化に広汎な文化差の存在が示唆されてきたことを受けて、大学生と20～70歳代成人にプロトタイプ・アプローチを適用することにより、日本人における尊敬関連感情語の意味的構造の解明が試みられた。そして、結果として「人物焦点尊敬・感情態度」と「行為焦点尊敬・感情状態」という2つの上位カテゴリが見出され、前者の下位には「敬愛」「心酔」「尊重」「畏怖」が、後者の下位には「感心」「驚嘆」が基礎カテゴリとして位置づけられることが明らかとなった。

第Ⅲ部(研究3)では、(義務尊敬に相当する「尊重」以外の)「敬愛」「心酔」「畏怖」「感心」「驚嘆」という5種の感情が日常的にいかなる行為傾向と結びついているかについて、大学生対象の検討が行われ、「敬愛」「心酔」が「驚嘆」に比して自己是正・自己向上の動機づけを高め得る傾向などが認められた。第Ⅳ部(研究4・5・6)では、この5種の感情それぞれが、どのような事象に対する認知的評価の下で、またいかなる個人において特に経験されやすいかについて大学生対象の検討が行われ、例えば、他者の卓越性が努力や意志に帰属できる場合に尊敬関連感情全般が生起しやすいこと、また尊敬関連感情に絡む個人的特性因子として「特性尊敬」「特性心酔」「特性畏怖」の3種が仮定できることなどが明らかとなった。

第Ⅴ部では、尊敬関連感情の日常的機能が検討され、結果として、「特性尊敬」の高い個人がポジティブな可能自己の実現に向けて現実的に努力し、主観的幸福感が大きいことなどが見出された(研究7)。さらに3カ月間隔での2時点短期縦断研究により、第1時点目に明確に尊敬する人物を有していた個人が、2時点を通じて、可能自己が明確であり、自己向上に関わる意欲や行動をより顕著に示していたことが明らかとなった(研究8)。

以上のように、本論は、尊敬関連感情に関して、日本人におけるその概念構造、そして事象に対する認知的評価から行為傾向を経て日常的機能に至るまで、包括的な解明を試み、「自己ピグマリオン」仮説の部分的証左を得たという点において高く評価し得るものである。よって、本論文は博士(教育学)の学位にふさわしい水準にあるものと判断された。